

## <前回・ローマ帝国、イエス、パウロ>

### (1) 伝統的な初期キリスト教理解

1. 南原繁『国家と宗教——ヨーロッパ精神史の研究』（1942年）
2. 宗教改革に遡り、19世紀の聖書学によって強化されたイエス像、キリスト教理解。  
非政治的で内的なキリスト教、近代的宗教理解

↓

この伝統的な議論については、まずイエス研究において批判的な研究がなされ（1960年代以降）、それはさらにパウロ研究に及んでいる（1990年代以降）。

3. 近代聖書学のもう一つの帰結：歴史的懐疑論
  - ・伝承史：イエス→断片的な口承伝承（弟子たち）→収集・文書化→編集
    - ・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算（様式批判）、イエス自身には遡及しない。
    - ・編集者の意図の解明（編集批判）
  - ・ブルトマン『イエス』（未来社）

### (2) イエス・ルネサンス——懐疑論を超えて

4. 過去についての知を断念できるか？ あるいは過去についての知はどの程度修正可能か（歴史修正主義の問題）？

・ハンス・ヨナス『アウシュヴィッツ以後の神』法政大学出版局。

5. イエス・ルネサンス：

「今日イエス研究が蘇ったというのは驚くべきことである」、「それが進行中であること」（ボーグ、21頁）

1970年代に遡り、サンダース、ジョージアン、ホースレイ、マック、ボーグ

「イエスの言葉を中心にして方法論を展開するなら、徹底した史的懐疑主義に陥ることは避けられない。イエスの言葉を直接引用したものは、仮にあったとしても稀である」（34-35）

「これとは別の出発点」「宗教的人物の類型論（宗教史学、人類学、宗教心理学から引き出される）に慣れ親しむことであり、これによって啓発的な地の利が得られるのである」

6. 聖書学的基本的方法論である歴史的批判的方法は、社会科学と結びつく。

### (3) クロッサンの聖書学

7. 方法論、あらゆる方法を駆使すること

・ジョン・ドミニク・クロッサン『イエスとは誰か——史的イエスに関する疑問に答える』新教出版社、2013年。

### (4) イエスの宗教運動の政治性

8. 「神の国」というキーワードをいかに解釈するか

キリスト教神学と同様に、聖書学においても、「イエス」は常に研究者の中心的な関心を占めてきた。→歴史的イエスの探求、「神の国」「終末論」の問題。

10. クロッサン

「神の王国」とは、皇帝（カエサル）ではなく神が玉座に就いた世界、皇帝（カエサル）ではなく神が公明正大に支配する世界、という意味です。宗教概念であると同時に政治概念なのです。そして倫理概念であると同時に経済概念なのです。」（62）

「神の王国の分け隔てない平等な性格の象徴として、イエスは開かれた食卓の伝統を残しました。その後、特定のキリスト教徒集団が最後の晩餐を儀礼に仕立てて、あの解釈の伝統にイエスの死の記念を付け加えたのです。」(78)

「現代の民主主義よりもずっと過激な体験」(79)

#### (5) パウロ・ルネッサンス

11. アメリカの聖書学会 (SBL) の「聖書と帝国」分科会 (*The Bible and Empire Unit*)

パウロ・ルネッサンス、イエスからパウロへ

12. Richard A. Horsley (ed.), *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.

Introduction (Richard A. Horsley)

Protestant interpreters have traditionally understood Paul in opposition to Judaism. Luther's discovery of "justification by faith" in Paul's Letter to the Romans, the solution to his frustrating quest for a sense of righteousness, became the formative religious experience through which Paul's letters have been read. Paul became the paradigmatic *home religiosus* whose quest for salvation by a compulsive keeping of the Law in his native Judaism drove him to his dramatic conversion to God's grace manifested in Christ.

This approach to Paul that has dominated NT studies for generations is based on the unquestioned and distinctively modern Western assumptions that Paul is concerned with religion and that religion is not only separate from political-economic life, but also primarily a matter of individual faith. (1)

in the aftermath of the Holocaust

the great hero of faith who articulated foundational Christian Theology was discovered to share the same fundamental "covenantal nomism" of Judaism,

Paul's new religion of personal faith was no longer seen as sharply opposed to Judaism. (2)

13. 西洋的キリスト教会の神学的基盤としてのパウロ

パウロへの反発・パウロ批判、体制的イデオロギーの代表

14. 新しいパウロ解釈：1980年代以降

体制派パウロから戦うパウロへ

政治哲学におけるパウロへの注目

15. 現代思想におけるパウロ → バディウ、アガンベン、ジジェク

古代の歴史的・思想的文脈におけるパウロ

ユダヤ思想の文脈におけるパウロ

聖書学的議論（従来の閉鎖的な議論に対して）への新たな問題提起

#### (6) パウロと政治哲学

・「政治神学への向けたパウロ」あるいは「パウロから政治神学へ」

13. 難問としてのローマ書 13章（「1 人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。」）

14. 権威に対する服従とは何か。時間という視点から。

・終末の切迫という時間性における勧め（→ 一般化できる命題か？）

「この世」の秩序は絶対的な意味をもつわけではない。

・古代の王制は過ぎ去った。現代においては、「主の指示を受けて」いない問題については、自らの「意見」をもつ必要がある。古代の王への服従と、現代の政府への服従は同じなのか。パウロは、現代の民主主義的選挙によって選ばれた「指導者」について、「すべて神によって立てられたもの」と語るだろうか。

「権威」の問題は、官僚制と警察力、税制をめぐる。戦争は、テーマではない。

## 7. 国教化と古典的政治神学

### (1) ローマ帝国の迫害とキリスト教

犯罪者として処刑されたイエスとその運動の後継者としての初期キリスト教会。

対決は不可避的であったが、それは何をもたらしたのか。

1. 迫害下のキリスト教(1~3世紀): この間にキリスト教の原型が完成した。
  - 66: ローマの大火、皇帝ネロによるキリスト教迫害。 第1次ユダヤ戦争(66-70)
  - 95頃: ドミティアヌス帝時代のキリスト教迫害。 第2次ユダヤ戦争(132-135)
  - 249: デキウス帝の迫害
  - 303: ディオクレティアヌス帝(284-305、四分割統治制)の迫害
    - 迫害(規模も期間も様々、棄教者の問題) → 弁証を介した思想形成
2. ユダヤ教から継承したもの → パウロとルカ文書における「キリスト教起源神話」 = キリスト教的歴史理解の確立。
  - 1) 契約思想(思想と思考方法): 古い契約と新しい契約
  - 2) 黙示的終末論: 宇宙的ヴィジョン → 罪と悪に対する勝利、ハルマゲドン
    - 知恵文学: ログス・キリスト論
  - 3) キリスト教的正典: LXX(ギリシャ語訳旧約聖書)のキリスト教化 + 新約諸文献
  - 4) 儀礼の形式(シナゴグにおける儀礼): 動物犠牲なしの礼拝
3. ローマの平和か、神の平和か(二者択一)
  - ローマの平和(Pax Romana): 政治と経済による上からの支配、そのもとでの秩序 = 平和。
    - ・ 皇帝崇拝: 平和は皇帝の恩恵である。神的な皇帝。
    - ・ ローマの軍隊による地中海世界の統合 = 古い諸国家の滅亡
      - 交通網と法の整備
    - ・ 経済: 貨幣の統一、商品作物の海洋交易による富の集中。

↓

    - 民族的伝統・文化の解体と環境破壊
4. ヨハネ黙示録: バビロンと新しいエルサレムの対立。
  - 「新しい天と新しい地」「もはや海もなくなった」(黙示録21:1)
5. キリスト教はこの対立の中で、ローマの秩序を利用することによって拡大し、ローマとの妥協に至った。

### (2) 迫害から公認・国教化へ

6. キリスト教の公認と国教化

313：ミラノ勅令（コンスタンティヌス大帝）

325：ニケア公会議

381：コンスタンティノポリス公会議

392：国教(テオドシウス帝)

#### 7. キリスト教の公認と国教化

エウセビオス神学＝ローマ帝国の政治神学

「一にして唯一である神は、「多」に立ち向かう「一」として、ご自分に仕えるコンスタンティヌスを聖なる完全な武具によって固めさせた」、「神は、コンスタンティヌスの手で、人類から無数の無神論者を一掃し、ご自身への真の献身の教師として、彼をすべての民族のために立てられたのです。彼は、すべての者が聞こえるような大きな声でもって、彼らが実在する神を知り、けっして存在などしない神々の迷妄から袂を分かつべきだと証しされたのです」（『コンスタンティヌスの生涯』12）。

↓

国教化から見た歴史神学の成立：『教会史』

#### 8. 政治的秩序と宗教的秩序の相補性＝権力と権威の相互性

天上の秩序と地上の秩序、天の統一と地の統一（上と下との照応性、照応の論理）

↓

政治神学

cf. 近代的な政教分離

#### 9. 政治的要請としての「正統一異端」論争

宗教的要因との関連性の問題

多様性を保持しつつ、異端との対応で徐々に正統教会へ

- ・近代日本におけるキリスト教合同問題
- ・ポスト・プロテスタント時代のキリスト教  
ティリッヒ

#### 10. 三位一体論の意義

- ・国教会＝正統教会の基盤となる教理→その後のキリスト教世界の基礎
- ・独裁的絶対的な神理解への批判契機（モルトマン）、多元性の保持

神の単一支配（モナルキア的政治神学）に対する三位性神学（オイコノミア）

→ シュミットのペーターゾンの論争

→ アガンベンは、ここに、近代の主権論と生政治（経済と統治）との分節の起源を見ている。

### （3）国教化の帰結

#### 11. 国家神学・政治神学としてのキリスト教神学

「神学」：キリスト教の発明ではない。古代ギリシャ起源。

ストア哲学の神学区分（アウグスティヌス）：

民衆の神学（神話）／国家の神学（ポリスの国家儀礼）／自然の神学（哲学）

↓

キリスト教による「神学」の変革

キリスト論の意義（芦名定道『自然神学再考』晃洋書房）

12. 「国家の神学」を組み込むことによって、キリスト教神学の成立過程は完了した。
13. 絶対平和主義(軍隊の宗教性)から正戦論(アウグスティヌス)へ、そして聖戦論へ。  
キリスト教の国教化は、国家に対する教会の関わりについて再考を迫ることになる。  
パウロの国家論の意義(宮田光雄)

#### 14. アウグスティヌスの「神の国」論

「四世紀終わりから五世紀初めにかけて、キリスト教は、忍耐から確立へと変遷した。伝統的なローマの祭礼は国の支持を失い、皇帝たちは、キリスト教の神をローマの運命の保証人として頼りにしたのだった。ミラーノの司祭、アンブロシウスはローマ皇帝にユダヤの王という聖書のイメージを適用することによってこれに答えた。ヒッポのアウグスティヌスは、キリスト教徒の支配者による戦争の遂行を正当化した地の国と神の国の相互補完の理論を展開した。」(マーカス、162頁)

↓

しかし、エウセビオスとの差異(ローマ帝国は「地の国」という原理に規定されている)は重要。

このアウグスティヌスの意図とその後の影響史・解釈史との区別、そして関連。

Phillip Wynn, *Augustine. On War & Military Service*, Fortress Press, 2013.

#### 15. 南原繁『国家と宗教』1942年。

「アウグスティヌスの『神国論』」「ローマ的「地の国」に対して「神の国」の永遠性を論証し、当時、キリスト教を国教として採用したローマがかえって間もなく滅亡したことについて、異教側からなされた論難に対し、キリスト教の立場を弁護したこの書において、いまわれわれに必要なのは、神の国の地上における具体的実在としての「教会」の概念が立てられたことである。これこそ、この後の中世の全思想が、拠ってもって自らの文化を建設するに至った重要な礎石が据えられたところのものである。」(106)

エウセビオス(263ごろ-339)とアウグスティヌス(354-430)の状況の差。

ゲルマン移動(375-) :

#### 16. 現代の問題：キリスト教と公共性

国教会体制後の政治的状況で、なおも、正戦論にとどまるのか。

国民国家・民族主義を超えた普遍性の実現を試みるのか。

↓

下からの公共性、ネットワークとしての公共性

#### <参考文献>

1. ロドニー・スターク『キリスト教とローマ帝国——小さなメシア運動が帝国に広がった理由』新教出版社。
2. エウセビオス『教会史』全三巻、山本書店→講談社。  
『コンスタンティヌスの生涯』京都大学学術出版会。
3. アウグスティヌス 『神の国』岩波文庫。
4. R.A.マーカス 『アウグスティヌス神学における歴史と社会』教文館。

5. ピーター・ブラウン『古代末期の世界——ローマ帝国はなぜキリスト教化したか?』  
刀水書房。
6. J. ヘルジランド、R. J. デイリー、J. P. バーンズ  
『古代のキリスト教徒と軍隊』教文館。
7. 宮田光雄 『平和の思想史的研究』創文社。  
『平和のハトリヴァイアサン——聖書的象徴と現代政治—』岩波書店。  
『非武装国民抵抗の思想』岩波新書。  
『国家と宗教——ローマ書十三章解釈史=影響史の研究』岩波書店。
8. 石川明人 『キリスト教と戦争——「愛と平和」を説きつつ戦う論理』中公新書。
9. シュミット 『政治神学』未来社。
10. J. モルトマン、J. B. メッツ 『政治的宗教と政治的神学』新教出版社。
11. アガンベン『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』以文社。  
『王国と栄光——オイコノミアと統治の神学的系譜学のために』青土社。